

# 川の表情・川環境ネットワーク

代表理事 宮村 忠

8月の下旬、猛暑のなか大分県の番匠川にでかけました。この川は大分県南部の佐伯市を流れ、464km<sup>2</sup>ほどの規模にすぎないのですが、一級水系で、しかも「1市1河川」です。流域の大部分は渓谷が続き、清流が山間部を蛇行して流れ、河口近くに狭い平野があって、佐伯市の中心街を形成しています。たいへん漁種の多い川で、地回り地帯をかかえているので、河道に堆砂が点在していて、川遊びにも恵まれています。一方河口の漁港は深くて流れの強い豊後水道を漁場として、所狭しと漁船が泊まっており、サバ、アジ、タイ、ブリの宝庫となっています。この川の名のごとく、番匠が大勢いたようです。「番匠」は、匠が交替で大工の労務にあたった仕組みをいいますが、古代から交替で都に上り、木工寮に泊まって勤務した職人たちの方式です。そんな一群の集落から、「番匠川」の名で呼ばれるようになったようですが、いかにも職人氣質の川風情がしのべれます。

人の一群ではなく、個人名の川もあります。愛媛県松山市を流れる重信川が、人の名が川の名になった珍しい例です。この川は、愛媛県を代表する川です。松山城下を育むために、扇状地に思いきった川の付け替えを行ったのが、松山藩の普請奉行・足立重信で、近世初頭のことでした。河道を安定させ、扇状地の上を乱流して流れていた伊予川を、現在の重信川の河道に落ち着かせました。足立重信は、松山城主加藤嘉明の重臣として活躍しました。伊予川の改修を行い、大規模な新田開発に成功し、築城と城下町の建設などの任にあたりました。20数年を費やしながらも、完成には至らなかったのですが、その功は藩主はもとより、地域の喝采を受け、土地に刻まれた河道と川の名に刻まれた「重信川」が誕生しました。

人間の生活とは全く関係しないで、夜空にまたたく星物語「七夕伝説」の川もあります。北海道の渡島半島南にある天ノ川が代表します。というのは「天ノ川」は1つではなく、茨城県常陸高浜台地に、谷を流れる天ノ川があります。奈良県十津川支川にも天川村を流れる天ノ川があります。ただしここでは「テンノカワ」です。大小を問われなければ、天ノ川は度々みかけます。北海道南部の天ノ川は上ノ国町と江差町の境を流れ、JR江差線が沿って走っていましたが、昨年廃線になってしまいましたが、旧JR江差線に、列車が止まらない「天ノ川」駅がありました。七夕伝説の天ノ川

に思いをいだいた人達が「駅ではない駅」、つまり列車が止まらない駅をつくり、「天ノ川」の駅名をつけて楽しんでいました。天にも地にも「天ノ川」ということなのでしょう。「駅ではない駅」の下流に国道橋があり、その脇に「2級河川 天野川」の河川名が表示されていました。地図では「天ノ川」が、河川の正式名は「天野川」ということなのでしょうが、少々豊色消しのような感じでした。

茨城県の天ノ川は、恋瀬川に合流し、霞ヶ浦に流れ出します。七夕伝説の天ノ川が恋瀬川の支川ということで、ほんのりした川の情景を映し出します。そんな仲を増長するかのようになり、すぐ西側には筑波山麓を流れ下る男女川があります。歌枕の川です。小倉百人一首に、「筑波嶺の峰より落つる男女川、恋ぞつもりて淵となりぬ」（陽成院『後撰集』）とあります。歌枕になった男女川は、筑波山麓からわずか2kmほど流れ下り、桜川に合流します。桜川は、恋瀬川と並行して霞ヶ浦に流れ出します。男女川は、粋な歌枕の川ですが、天ノ川、恋瀬川、桜川とセットで、人情の表と裏に通じる川の様相を想い浮かべることができます。ところで、男女川は小倉百人一首のおかげで身近な川ですが、もう1つの男女川の顔があります。昭和初期の人気力士、三十四代横綱男女川です。大横綱双葉山と同時代で、相撲人気を多いに盛り上げました。横綱男女川は、土俵の上だけでなく、外伝で名をはせたようです。現役横綱が自転車を乗りまわしたり、小型自動車を買って巨体を押し込み自ら運転をして部屋に通ったり、大学へ聴講に通ったり、話題に事欠かない異色の力士ぶりが伝えられています。

川の表情は多様です。その風情は、川と人との環境ネットワークとでも言えるのでしょう。



番匠川の河原